むかし　さなげ山のふもとに　大変大きな　木が　ありました

この辺りを　領地にしていた　お殿様は　とっても　鷹狩りの好きなお殿様で

さなげ山のふもとに　出かけて行っては　鷹狩りをやっていました。

　ある日　お殿様が　とても可愛がっておりました　一羽の鷹が

その大木に　巣を作り　かわいい卵を産みました

村人たちは喜んで　ヒナにかえる日を　心待ちにしておりました

ところがある日　どこからか　うわばみが

巣ごもりをしている　鷹の巣を狙って　やってきました

これを聞いたお殿様は　さっそく　村人に　おふれを出しました

「ヒナがかえって　巣立つまで　見張りをするように

けっして　うわばみに　鷹を襲わせるでないぞ」

村人たちは　大騒ぎ

毎日交代で　うわばみの見張りを　始めました。

今日は　茂左衛門と助三郎の　当番の日です

二人は　竹やぶから　竹を切ってくると　それで弓と矢を作り　うわばみを　見張っておりました

「どうか　一日が　何事もなく　無事すぎますように・・・」

と祈りながら　二人が　変わりばんこに　昼飯を　すませようとした時

急に　うわばみが　かま首を持ち上げ　鷹の巣をねらって　大木を上り始めました

二人の顔は真っ青です

「たいへんだ！　お殿様の　大切な鷹の巣が　うわばみに　飲みこまれてしまう」

茂左衛門は　夢中で　弓に矢をつがえ　一本目の矢を　放ちました

矢は　見事に命中

続けて　二本目の矢を　放ちました　二本目の矢も　命中しました

そして　三本目　四本目と　がむしゃらに矢を放ち　十八本目の矢を　放とうとした時　黒い雲が　空を覆い　やがて　大粒の雨が　叩きつけるように　降ってきました

うわばみは　矢が体に突き刺さったまま　七転八倒しながら　山奥深くに　姿を消してしまいました

「大変なことになった」

茂左衛門と助三郎は　　どしゃぶりの　雨の中を　急いで　村へ帰っていきました

猿投山の西南に「鈴が滝」という　きれいな　水の滝がありました

怪我をしたうわばみは　あえぎながら　受けた傷を　いやそうと

滝つぼに入って行きました

川は　血で赤く染まって　帯のように　流れていきました

この赤く染まった川を見た　村人たちは　不吉なことが　起こりはしないかと

とても心配しました

茂左衛門と助三郎は

「鈴が滝の方へにげたのか。退治してしまおう。」

と　村人とともに　鈴が滝へ行き

　そして　滝つぼで　傷を癒やしている　うわばみを

みんなで取り囲み　一気に　退治してしまいました

「たたりがあっては大変だ　ていねいに　葬むってやろう」

そして　胴体は　鈴が滝のかたわらに　頭は　乙部に持ち帰り

手厚く葬り　弁財天を祭って　霊をなぐさめました

お殿様は　この話を聞き　たいそうお喜びになり

村人は　お殿様から　お褒めの言葉を　いただきました

そして　茂左衛門と助三郎には　大沢の姓をお与えになり

茂左衛門には　大蛇を仕留めた褒美に　三つ鱗の定紋と　「下の大沢」を

助三郎には　矢を持って行ったので　　鷹の羽の定紋を　与えられ　「上の大沢」と付けられました

また　赤い川を　初めて見た人には「赤川」という姓を　お与えになりました

そして　大木のあった辺りを　「鷹の巣」と　呼ぶようになり、

のちに　うわばみをまつった　弁財天に　お参りすると

どんなに天気のいい日でも　空が曇って　雨が降る　といわれるようになり

村の人たちは　日照りで　困ったときは　この社に集まって　雨乞いをしたということです